

平成26年度
さらなる学校改善に向けて
～全国学力・学習状況調査の結果分析から～

平成26年12月
掛川市全国学力・学習状況調査分析委員会

目 次

1	はじめに	2
2	調査の概要	2
	(1) 調査の対象	
	(2) 調査実施日	
	(3) 調査の内容	
3	分析委員会及び分析の方針	3
4	分析結果	3
	【小学校教科】(1) 国語	4
	(2) 算数	6
	【中学校教科】(1) 国語	8
	(2) 数学	10
	【小学校質問紙】(1) 児童質問紙	12
	(2) 学校質問紙	14
	【中学校質問紙】(1) 児童質問紙	15
	(2) 学校質問紙	17
5	学びの環境改善のための提言	18
6	これまでの掛川市の調査結果について	19
7	おわりに	21
8	平成26年度掛川市全国学力・学習状況調査分析委員会	22

1 はじめに

平成26年度全国学力・学習状況調査は、掛川市内全小中学校を対象に行われた。本調査は、文部科学省により、「全国的な義務教育の機会均等とその水準の維持向上」を目的に平成19年度から実施されている。

すでに全国及び県からは本年度調査結果が示されたところではあるが、本分析委員会は、掛川市の教育及び児童生徒の状況を把握し、その成果と課題を見極め、児童生徒の学力向上に向けた学びの環境改善に資することを目的として設置された。

また、本報告は、平成26年度の結果分析をまとめたものであるが、各教科ごとの改善策を具体的に示すことで、よりよい環境改善に役立てていただけるよう配慮した。さらに、平成26年度の結果分析と併せて、昨年度掛川市内小中学校の質問紙による結果を比較・分析することにより、掛川市の児童生徒の学力向上に向けた学びの環境改善の経年変化も考察した。

なお、本調査結果の取扱いについての配慮事項は、文部科学省による実施要領に以下のようにある。（「平成26年度全国学力・学習状況調査に関する実施要領」より一部抜粋）

「調査により測定できるのは学力の特定の一部であること、学校における教育活動の一側面であることなどを踏まえるとともに、序列化や過度な競争が生じないようにするなど教育上の効果や影響等に十分配慮することが重要である。」

したがって、本分析委員会においても、これらのことに配慮して分析結果をまとめた。本結果については、市内全体の傾向をまとめたものであり、全ての児童生徒、学校に当てはまるものとは限らないが、学校教育や家庭生活の改善のために活用いただければ幸いである。

2 調査の概要

(1) 調査の対象

小学校第6学年 実施児童1,011人
中学校第3学年 実施生徒 998人

(2) 調査実施日 平成26年4月22日（火）

(3) 調査の内容

ア 教科に関する調査

- ・主として「知識」に関する問題(国語A、算数・数学A)
- ・主として「活用」に関する問題(国語B、算数・数学B)

イ 生活習慣や学習環境等に関する質問紙調査

- ・児童生徒に対する調査
- ・学校に対する調査

3 分析委員会及び分析の方針

分析委員会は、市内小中学校の校長・教頭・教諭の13名で組織された。小学校部会、中学校部会の2部会に分かれ、教科及び質問紙ごと、以下の方針に従って分析を行った。

- (1) 各教科及び質問紙(児童生徒・学校)の結果を全国・県の状況と比較・分析することを通して、掛川市の教育に関する特徴や課題を整理し、考察を加え、改善策をまとめる。
- (2) 各教科の状況と質問紙の内容のクロス集計から、教科の力をつけているのは、どのような児童生徒かを分析する。
- (3) 質問紙においては、平成25年度実施のデータとも比較し、生活習慣、学習習慣について考察を加える。

4 分析結果

教科に関する調査において、各教科の平均正答率は、小学校、中学校ともに全ての教科で、全国・県よりも高い結果となった。

小学校においては、全国と比較して、国語Bが6ポイント、算数Bが5ポイント高かった。また、昨年度課題であった国語Aについては、県・全国より1ポイント高く、各学校で取り組んできた成果が表れたといえる。

中学校においては、全国と比較して、国語Bが9ポイント、数学Aが11ポイント、数学Bが15ポイント高かった。特に、数学A・Bともに県と比較しても6ポイント以上高く、数学の力は高い傾向にあるといえる。

※全国・県の平均正答率を100とした場合の市の平均正答率の指標値

区分 \ 教科	小国A	小国B	小算A	小算B	中国A	中国B	中数A	中数B
全国比較指標値	101	106	103	105	103	109	111	115
県比較指標値	101	101	102	104	101	106	106	108

【小学校教科】

(1) 国語

ア 成果と課題

(%)

全国・県に比べて特に正答率の高かった調査問題	本市	県	全国
「～たり、…たり」という表現に直して書く。 【A6一書くこと・伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項・短答式】	82.0	77.0 (+5)	74.9 (+7.1)
【詩2】に対する山田さんの解釈として適切なものを選択する。 【B3二読むこと・選択式】	56.1	54.7 (+1.4)	48.5 (+7.6)
付箋の内容を関係付けて、野口さんのまとめを書く。 【B2二書くこと・読むこと・記述式】	33.8	32.9 (+0.9)	26.9 (+6.9)

全国・県に比べて特に正答率の低かった調査問題	本市	県	全国
故事成語の使い方として適切なものを選択する。 (五十歩百歩) 【A2一伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項・選択式】	46.7	54.4 (-7.7)	55.8 (-9.1)
(百聞は一見にしかず) 【A2二伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項・選択式】	48.6	46.7 (+1.9)	49.9 (-1.3)
漢字を書く。 (勝利をいわう) 【A1ニ(2)伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項・選択式】	52.6	50.1 (+2.5)	59.3 (-6.7)
(かぜをよぼうする) 【A1ニ(3)伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項・選択式】	75.0	76.9 (-1.9)	77.4 (-2.4)
司会④の発言の内容をまとめて書く。 【B1一話すこと・聞くこと・短答式】	63.0	65.1 (-2.1)	65.2 (-2.2)

※【 】内は、問題番号、学習指導要領の領域等、問題形式の順。

総じて、国語A（知識）、国語B（活用）ともに、全国・県の平均正答率を上回った。昨年度と比較し、無答率が大きく減少したことも本結果につながったと考えられる。

一方、全国・県の平均正答率を大きく下回ったのは、「故事成語の使い方として適切なものを選択する」問題であった。「五十歩百歩」の使い方を問う選択式の問題であったが、その成り立ちや意味の理解が不十分なことが明らかである。また、「祝う」「予防する」といった、身近な漢字が正確に書けないことも課題といえる。

また、討論会での異なる意見をもつ二人の発言に、共通する観点を見つけて書く問題も、全国・県の正答率を下回った。昨年度の「<だから>や<理由は>などの手がかりのない文章から理由を読み取ること」と同様、「読んで理解し、考えてまとめる。」ことに課題があるといえる。

イ クロス集計の結果

以下の質問事項に対する回答を昨年度と比較すると、肯定的回答が増加していることがわかる。

児童質問紙の質問事項	H25	H26
国語の勉強は好きですか。	48.4%	52.4%
国語の勉強は大切だと思いますか。	91.1%	94.3%
国語の授業の内容は良く分かりますか。	76.1%	77.8%

国語の授業で目的に応じて資料を読み、自分の考えを話したり、書いたりしていますか。	63.8%	66.7%
国語の授業で意見などを発表するとき、うまく伝わるように話の組み立てを工夫していますか。	58.8%	60.9%
国語の授業で自分の考えを書くとき、考えの理由が分かるように気を付けて書いていますか。	71.2%	73.1%
国語の授業で文章を読むとき、段落や話のまとまりごとに内容を理解しながら読んでいますか。	69.6%	75.6%

この回答結果は、授業改善が進みつつあるあることの表れであり、結果の好転に結びついただけと考えられる。

また、「国語は大切だと思いますか」や「国語の授業で学習したことは、将来、社会に出たときに役に立つと思いますか」の質問には、80%以上の児童が肯定的回答をしており、国語の学習に対して高い意識をもっていることがわかる。この意識を、「わかった」「楽しい」といった満足感につなげる手だてが必要である。

「テレビのニュース番組やインターネットのニュースを見ますか」の質問には、平均正答率の高い児童も低い児童も、肯定的回答をしているのに対し、「新聞を読んでいますか」の質問に肯定的回答をしたのは、平均正答率の高い児童である。映像からだけでなく、「新聞を読む」等、文章から情報を獲得する機会をもつことが重要であるといえる。

ウ 改善策

(ア) 故事成語の指導を工夫する。

成り立ちを知ったり、短文を作ったりする等の活動を意図的に組む。また、それを用いて発表会を行ったり、スピーチしたりする機会をつくり、理解を深めることが必要である。(言語活動の充実)

(イ) 読書活動の推進

朝読書、読み聞かせ、家庭読書、授業中の読書と、読書は児童の生活に定着してきている。さらに、授業の中で目的をもった読みを取り入れることが必要である。

例えば、

- ・知識を獲得するために、複数の文章を読む。(新聞を読む。)
- ・作者を理解するために、複数の作品を読む。
- ・自分の経験や考えと比較しながら読む。

等の活動を意識して取り入れていく。

(ウ) 自分の考えを自分の言葉で表現する機会をつくる。

国語の授業だけでなく、他教科の授業や体験的な学習活動において、感じ取ったことを言葉を用いて表現する機会をつくる。

例えば、

- ・文章を書くときには、教科書巻末の「評価・判断や感情を表す言葉」等を参考に書き、語彙力や表現力を付ける。
- ・理科の調査・研究において、仮説を立てて観察・実験を行い、その結果を整理して、まとめる。
- ・社会科の新聞作り等では、自分の考えが相手に伝わるように書く。
- ・地域の方に、正しい文字と言葉でお礼の手紙を書く。

等の活動を意識して取り入れていく。

(2) 算数

ア 成果と課題

(%)

全国・県に比べて特に正答率の高かった調査問題	本市	県	全国
コンパスを使った平行四辺形のかき方について、用いられている平行四辺形の特徴を選ぶ。 【A 6 図形・選択式】	58.8	56.1 (+2.7)	52.0 (+6.8)
1目盛りを50m ³ として学校の水の使用量の表を棒グラフに表すとき、棒が縦20マスの枠の中に入らない月を選び、そのわけを書く。 【B 2 (2) 量と測定・数量関係・記述式】	75.5	71.7 (+3.8)	69.1 (+6.4)
今年の昼食時間を見直したときに、今年は準備の時間を何分間にすればよいかを書く。 【B 3 (1) 量と測定・短答式】	44.7	39.4 (+5.3)	38.6 (+6.1)
示された分数の中から、 $1/2$ より大きいものを選ぶ。 【A 3 数と計算・選択式】	78.6	76.4 (+2.2)	72.5 (+6.1)

全国・県に比べて正答率の低かった調査問題	本市	県	全国
6・7月の水の使用量が、1年間の水の使用量の $1/4$ より多いことを説明するために用いる適当なグラフを選ぶ。【B 2 (3) 量と測定・数量関係・選択式】	60.4	57.7 (+2.7)	61.5 (-1.1)
$9 - 0.8$ を計算する。 【A 1 (3) 数と計算・短答式】	82.9	82.4 (+0.5)	83.8 (-0.9)
$46 + 57$ を計算する。 【A 1 (1) 数と計算・短答式】	96.7	97.4 (-0.7)	96.9 (-0.2)

※【 】内は、問題番号、学習指導要領の領域等、問題形式の順。

総じて、算数A（知識）、算数B（活用）どちらの平均正答率も、全国・県を上回った。各領域の平均正答率も、全て全国・県を上回った。

「数量関係」に関わるAの問題では、問題別に見ると、「数と計算」領域のA 1 (3) とA 1 (1) の正答率が高く、整数・小数・分数の四則計算は、相当数の児童ができています。ただ、全国の前年より低いことから、基礎的・基本的な計算の技能のさらなる定着を図りたい。

また、「量と測定」「数量関係」の正答率は低かった。特に、B 2 (3) は、選択式だが、正答率60%程度であり、全国を1.1%下回っている。目的に応じ、適切なグラフを選択できるようにすることに課題がある。

「量と測定」に関わるBの問題では、3 (1) や「3 (3) 示された分け方でスープを分けたとき、残りの30人にスープを分けることができるかどうかを選び、そのわけを書く」の正答率が、50%を下回った。情報や条件を図に表して整理したり、情報を基に理由を記述したりすることに課題がある。

「数量関係」に関わるBの問題では、「5 (3) 妹の身長を基に、妹の使いやすい箸の長さの求め方と答えを書く」の正答率が、全国・県を上回ってはいるが、35%程度に留まった。小数倍の意味を理解すると共に、情報を整理して、筋道を立てて考え、求め方を言葉や式を使って説明することに課題がある。

また、「1 (2) 二人の説明を基に、 37×24 の積が888になることを書く」の正答率も、全国・県を上回ってはいるが、60%を下回った。

他者の考えを解釈することや、異なる数値の場合でもそれを基に説明することに課題がある。

イ クロス集計の結果

総じてどの質問においても、「当てはまる」と答えた児童の平均正答率は高い。

項目別で見ると、平均正答率と、「算数の問題の解き方が分からないときは、あきらめずにいろいろな方法を考える」「算数の授業で、問題を解くとき、もっと簡単に解く方法がないか考える」の相関関係が高い。これは、算数の事象を多角的に考えたり、ふさわしい解き方を考えたりするなど、深く発展的に考え、他者の意見を参考にすることが、算数の力を向上させると分析される。

また、「算数の授業で問題の解き方や考え方がわかるようにノートを書いている」「解答を言葉や数、式を使って説明する問題を最後まで解答を書こうと努力している」の相関関係も高い。多様な考え方をするだけでなく、その考え方を自分の言葉で表出させることが、算数の知識をより確実にするものと推察される。

ウ 改善策

(7) 日常の事象を算数の問題として考えさせる。

身の回りの問題について、算数の事象として扱う機会を意図的につくる。家庭において、長さや量の感覚等に日常的に触れさせる機会をつくり、実感をともなった経験を積み重ねることで、生活と結びつけて考えさせる。授業の中でも、実生活にからめた興味ある問題を提示する。

(イ) 「量と測定」「数量関係」で、説明する活動を仕組む。

条件に合う時間や時刻について、示された情報を整理して、筋道を立てて説明する活動が必要である。説明する際には、言葉や数、式、図、表、グラフ等の数学的な表現と関連づける活動を充実させる。話型を意識して、事実・方法・理由を基に論理的に説明する機会を設ける。

(ウ) 日常的に書く活動を取り入れる。

Bにおいて、適切な算数用語を用いて、正しく段階にそって書くことが大切である。そのために、用語の意味を正しくおさえる。授業の終わりには、用語を用い、条件に従って、確かめる場面を設定する。

(E) 情報不足、情報過多の問題を取り上げる。

教科書後ろのページの問題(情報過多の問題)を確実に扱う。普段の授業においては、適応問題や深める問題を用意する。

(オ) 繰り返し練習の機会を設ける。

指導に当たり、計算の技能の習熟や維持を図るために、児童の学習の状況を把握し、必要に応じて、繰り返し指導する。

【中学校教科】

(1) 国語

ア 成果と課題

(%)

全国・県に比べて特に正答率の高かった調査問題	本市	県	全国
文章の構成や表現の仕方などについて、根拠を明確にして自分の考えを書く。 【B1 三 書くこと、読むこと・記述式】	57.6	52.9 (+4.7)	48.2 (+9.4)
複数の資料から必要な情報を読み取る。 【B2 二 読むこと・選択式】	67.6	63.4 (+4.2)	60.9 (+6.7)
資料から適切な情報を得て、伝えたい事実や事柄が明確に伝わるように書く。 【B2 三 書くこと、読むこと・記述式】	35.1	31.8 (+3.3)	28.4 (+6.7)
落語に表れているものの見方や考え方について、根拠を明確にして自分の考えを書く。 【B3 三 書くこと、読むこと、言語事項・記述式】	53.8	48.6 (+5.2)	46.5 (+7.3)

全国・県に比べて特に正答率の低かった調査問題	本市	県	全国
文脈に即して漢字を正しく読む。 【A8 二 1 言語事項・短答式】	74.9	80.8 (-5.9)	77.0 (-2.1)
文脈に即して漢字を正しく読む。 【A8 二 2 言語事項・短答式】	85.7	86.5 (-0.8)	88.6 (-2.9)
複数の資料を比較して読み、要旨をとらえる。 【B2 一 読むこと・選択式】	29.2	30.5 (-1.3)	31.4 (-2.2)

※【 】内は、問題番号、学習指導要領の領域等、問題形式の順。

総じて、平均正答率は、国語A（知識）・国語B（活用）ともに、全国・県より上回った。また、各領域の平均正答率も、全て全国・県よりも上回った。

とくに「書くこと」「読むこと」の領域においては、全国・県に比べて優れていたと言える。例えば、文章の構成や表現の仕方などについての問題や、落語に表れている物の見方や考え方についての問題など、根拠を明確にして自分の考えを書く問題は、正答率が大変高かった。また、記述式の問題の正答が高く、無答率は、全国・県に比べて全体的に低かった。今後さらに、書いた文章について観点を決めて、意見を述べ合う活動を取り入れることも重要であると感じられる。

一方、言語事項においては、特に文脈に即して漢字を正しく読む問題の正答率が低かった。これは、多様な語句についての理解を深めたり、文章に活用したりする取組が今後さらに必要であると考えられる。

また、読むことの領域では、本とインターネットの内容を比較して考える問題など、複数の資料を比較して読み、要旨をとらえる問題の正答率が低かった。読む目的を明確にした上で、中心的な部分と付加的な部分、事実と意見などを読み分け、必要な情報を正しく得るように指導することが大切である。

イ クロス集計の結果

質問紙調査結果と教科に関する調査結果の相関関係を分析したクロス集計結果では、「400字詰め原稿用紙2～3枚の感想文や説明を書くことは難しいですか」という質問に対して、「難しいと思う」と答えた生徒の正答率は、国語Aでは昨年度よりも+5.5、国語Bは-11.6という結果だった。また「難しいと思わない」と答えた生徒の正答率は、国語Aにおいて+3.1、国語Bにおいては-17.5という結果だった。依然として書くことにおいて苦手意識を持っている生徒が多いように思われる。しかし、生徒の意識と正答率とを比較してみると、知識に関する問題は、生徒本人が思っている以上に良くできており、逆に活用に関しては、生徒が思っている以上にできていなかったということがわかる。また、「学校の授業などで、自分の考えを説明したり、文章に書いたりすることは難しいと思いますか」と言う質問に対しても、同じ結果が表れている。

ウ 改善策

(ア) 多様な語句や語彙にふれる機会を多くし、言語活動の充実を図る。

1日当たり30分以上読書をする生徒の割合が、昨年比べて-1.3という結果だった。そのため、多様な語句についての理解を深めるために、今後も読書活動に加え、日常的な漢字指導（ドリル活用）や辞書の活用、場面に即した多様な語句（表現の技法）や語彙（慣用句・ことわざなど）にふれさせ、自らの文章に活用させることが有効であると考えられる。

(イ) 観点・条件を満たして伝え合う活動を充実させる。

普段から、感じたことをメモにとったり、ある程度の分量の文章を書いたりしていく力についてはついてきていると考えられる。今後は、その力をさらに発展させ、文章や資料を読み取った上で自分の考えを表現したり、お互いの考えを比較、検討、評価し、伝え合う活動の中で表現したりしていく力が必要であると思われる。例えば、条件に合った内容での意見交流や根拠を明確にして行う小集団活動、自分にとって必要な情報を収集して行うディベート、情報を分析して行う討論活動などが効果的だと考えられる。

(ウ) 論理的思考力を伸ばす。

授業において、新聞や資料、図表から情報を読み取って説明したり、文章にまとめたりする活動を積極的に行う。伝えたい事柄を、読み手に分かってもらうためには、どのような順序で論を展開していけば良いかを話し合うことで、論理的思考力を伸ばすことにつながると考えられる。

(2) 数学

ア 成果と課題

(%)

全国・県に比べて特に正答率の高かった調査問題	本市	県	全国
連立二元一次方程式を解く。 【A3(4) 数と式・短答式】	78.1	69.1 (+9.0)	67.2 (+10.9)
ハンドボール投げの記録の分布を表したヒストグラムから、記録の中央値を含む階級を選ぶ。 【A13(2) 資料の活用・選択式】	72.6	65.0 (+7.6)	52.0 (+20.6)
2つの偶数の和は偶数になることの説明を完成するために、式 $2m+2n$ を変形する。 【B2(1) 数と式・短答式】	77.9	70.0 (+7.9)	61.2 (+16.7)
2つの線分の長さが等しいことを証明する。 【B4(1) 図形・記述式】	58.4	48.0 (+10.4)	39.4 (+19.0)

特に正答率の低かった調査問題*	本市	県	全国
与えられた表を基に、宅配サービスの重量と料金の関係を、「…は…の関数である」という形で表現する。 【A9関数・短答式】	41.6	37.6 (+4.0)	35.8 (+5.8)
$\angle BAC = 110^\circ$ 、 $BD = AD$ のとき、 $\angle DAE$ の大きさを求める。 【B4(2) 図形・短答式】	29.3	26.7 (+2.6)	23.3 (+6.0)

※【 】内は、問題番号、学習指導要領の領域等、問題形式の順。

※本年度は、全国・県に比べて正答率の低かった調査問題はなし。

平均正答率は数学A（知識）、数学B（活用）ともに、全ての問題において全国・県を上回った。また、無答率については、全国・県を下回った。

特に、「数と式」の領域全体の平均正答率が高かった。これは、基礎的な用語の意味の理解や、連立方程式の解き方などが身につけていると考えられる。また、「資料の活用」の領域において、「ハンドボール投げの記録の分布を表したヒストグラムから、記録の中央値を含む階級を選ぶ」という問題の正答率が高かったことから、代表値などの用語の意味について十分理解していると考えられる。

一方、全国・県と比べて、正答率は上回っているが、課題となる問題もあった。例えば「与えられた表を基に、宅配サービスの重量と料金の関係を、『…は…の関数である』という形で表現する」という問題のように、様々な事象の中から、関数の関係にある数量を的確にとらえることに課題があると考えられる。また、「証明された性質に、さらに条件を加えて角の大きさを求める」という問題のように、証明された過程や結論を基に、発展的に考えることに課題があると考えられる。これらの問題については、無答率も高く、問題文の表現方法の変化や発展的な問われ方に対する理解力が不足していると考えられる。

イ クロス集計の結果

質問紙調査結果と教科に関する調査結果の相関関係を分析したクロス集計の結果では、「数学の授業で公式やきまりを習うとき、その根拠を理解している」生徒の正答率が高いことから、基礎知識が確実に身につけていると考えられる。さらに、「数学の授業で問題を解くとき、もっと簡単に解く方法がないか考えられる」生徒の正答率が高かったことから、その基礎知識を活用して考えを深めることができると考えられる。

また、「解答を言葉や数、式を使って説明する問題に対して、最後まで解答を書こうと努力した」生徒の方が、そうでない生徒の正答率を大きく上回っていたことから、課題に粘り強く取り組む姿勢を育てることが学力向上につながると考えられる。

しかし、「数学の授業で学習したことを普段の生活で活用できないか考えますか」という質問の正答率には大きな差がみられなかったことから、高い知識や技能を身につけた生徒が、必ずしも生活のなかで積極的に活用できているわけではない。そのため、身近な事象との関連を取り上げていくことが大切になると考えられる。

ウ 改善策

(7) 身近な事象の変化の様子や特徴の分析を行う活動を取り入れる。

関数で扱うデータや事象などを身近な生活場面から取り出し、与えられたデータからその特徴を読み取って、事象の変化を予測するような活動を充実させる。また、学習内容が身近な生活の中で利用されている場面を紹介する。

今回、課題となった問題では、ともなって変わる2つの数量の変化や対応の様子を調べる際に、独立変数と従属変数との違いを意識して「…は…の関数である」という言葉で表現できるかが問われていた。

具体的な授業例として、ある日の時刻と気温の関数など、従属変数が「時刻に対する気温」となる事象を扱い、「気温は時刻の関数である」という形で表現する活動を取り入れることが考えられる。その上で、独立変数と従属変数を入れ替えたものを考えていくことで、関数の意味を理解できるようにすることが大切だと考えられる。

(4) 証明の過程や結論を基に発展的に考えることができるようにする。

「かけがわ学力向上ものがたり」の「かけがわ型スキル」の思考力や問題解決力を育てるために、日頃から発展的に考える場면을充実させる。そのために、与えられた性質を証明するだけでなく、条件を変えたり加えたり、あるいは証明を振り返ったりすることを通して、新たな性質や問題を見いだす活動を取り入れることが大切である。

具体的な授業例として、2つの図形の合同や相似を証明したうえで線分の長さや角の大きさ、面積を求める問題など、合同や相似を利用した問題を考える活動を取り入れることが大切だと考えられる。さらに、線分の長さや角度を変えても同様に証明できるか考える活動を行いたい。

【小学校質問紙】

(1) 児童質問紙

ア 成果と課題

(%)

全国・県に比べて特に肯定的な回答が多かった調査問題	本市	県	全国
自分には、よいところがあると思いますか。	82.5	79.8 (+2.7)	76.1 (+6.4)
今住んでいる地域の行事に参加していますか。	91.2	74.9 (+16.3)	68.0 (+23.2)
5年生までに受けた授業の最後に、学習内容を振り返る活動をよく行っていたと思いますか。	78.4	73.3 (+5.1)	71.9 (+6.5)
5年生までに受けた授業のはじめに、目標（めあて・ねらい）が示されていたと思いますか。	83.2	79.5 (+3.7)	82.0 (+1.2)
学級みんなで協力して何かをやり遂げ、うれしかったことがありますか。	92.5	88.8 (+3.7)	86.5 (+6.0)
先生は、あなたのよいところを認めてくれていると思いますか。	86.2	82.5 (+3.7)	79.7 (+6.5)
友達に伝えたいことをうまく伝えることができますか。	79.6	73.6 (+6.0)	74.8 (+4.8)
家で、学校の宿題をしていますか。	98.2	97.6 (+0.6)	96.5 (+1.7)

全国・県に比べて特に肯定的な回答が少なかった調査問題	本市	県	全国
昼休みや放課後、学校が休みの日に、本（教科書や参考書、漫画や雑誌は除く）を読んだり、借りたりするために、学校図書館・学校図書室や地域の図書館にどれくらい行きますか。（「週に1～3回程度行く」と「だいたい週に4回以上行く」と回答）	15.0	20.1 (-5.1)	18.7 (-3.7)
家で、学校の授業の予習をしていますか。	40.4	41.7 (-1.3)	43.2 (-2.8)

本市の児童は、全国・県と比較して、「地域の行事に積極的に参加している」「自分にはよいところがある」「学級みんなで協力して何かをやり遂げうれしかったことがある」の割合が高い。

一方、本を読んだり、借りたりするために、学校図書館や地域の図書館に行く児童の割合は、全国・県よりも低い。また、家で学校の授業の予習をしている児童の割合も低い。

イ 昨年度との比較

昨年度の肯定的な回答率と比較すると、「家で学校の授業の復習をしている」が11.5%、「地域や社会で起こっている問題や出来事に関心がある」が9.0%、「家の人（兄弟姉妹を除く）と学校での出来事について話をする」が6.5%、「家で学校の授業の予習をしている」が3.4%増加している。

また、「5年生までに受けた授業では、本やインターネットを使って、グループで調べる活動をよく行っていたと思う」（昨年度は「普段の授業では、本やインターネットを使って、グループで調べる活動をよく行っていると思う」）が25.9%増加している。

一方、「昼休みや放課後、学校が休みの日に本（教科書や参考書、漫画や雑誌は除く）を読んだり、借りたりするために学校図書館・学校図書室や地域の図書館に週に1回以上行く」が2.9%減少している。

ウ クロス集計の結果

生活習慣では、「朝食を毎日食べている」「毎日同じくらいの時刻に起きたり寝たりしている」に肯定的な回答をした児童は、平均正答率が高かった。また、「1日当たりのテレビゲームをする時間が少ない」「携帯電話やスマートフォンを持っていないまたは使用時間が少ない」「新聞を読んでいる」「テレビのニュース番組やインターネットのニュースを見る」「読書が好きである」に肯定的な回答をした児童も平均正答率が高かった。家庭・地域に関する質問項目では、「家の人と学校での出来事について話をする」「地域の行事に参加している」に肯定的な回答をした児童も平均正答率が高い傾向が見られた。

学習習慣では、「家で学校の宿題をしている」「家で学校の授業の予習をしている」「家で学校の授業の復習をしている」の質問項目に肯定的な回答をした児童は、平均正答率が高かった。

エ 改善策

(7) 授業過程の再構築を継続して進める。

全国・県と比較して、「5年生までに受けた授業のはじめに、目標（めあて・ねらい）が示されていた」「5年生までに受けた授業の最後に、学習内容を振り返る活動をよく行っていた」と思っている割合が高い。このことは、「かけがわ学力向上ものがたり」で述べられている授業過程の再構築が確実に進められていることの表れと考えられる。引き続いて授業過程の再構築を進めていきたい。

(4) 学級経営や道徳の授業を引き続き充実させる。

全国・県と比較して、「学級みんなで協力して何かをやり遂げうれしかったことがある」「先生はあなたのよいところを認めてくれていると思う」「友達に伝えたいことをうまく伝えることができる」の割合が高い。このことは、児童一人一人が自分の意見を言ったり、友達の意見を認めたりすることができるなど、よりよい人間関係を基盤とし、達成感、自己肯定感を味わうことができる学級経営を行っているからであると考えられる。継続して学級経営を充実させていきたい。また、その基盤となる「かけがわ道徳」を全校体制で進めていく必要がある。

(7) 児童が家庭学習に主体的に取り組むことを継続して推進する。

「家で学校の授業の復習をしている」「家で学校の授業の予習をしている」は昨年度の肯定的な回答率を上回り、「かけがわ学力向上ものがたり」に述べられた家庭学習に主体的に取り組むことが着実に行われている表れと考えられる。しかし、「家で学校の授業の予習をしている」に肯定的な回答をした児童の割合は全国も県も下回っている。家庭で授業の予習へ取り組めるような手だてを講じるとともに、家庭学習への主体的な取組を継続して進めていきたい。

(2) 学校質問紙

ア 成果と課題

(%)

全国・県に比べて特に肯定的な回答が多かった調査問題	本市	県	全国
調査対象学年の児童に対して、前年度に、「朝の読書」などの一斉読書の時間を設けましたか。	100	77.6 (+22.4)	61.1 (+38.9)
学校の教員は、特別支援教育について理解し、前年度までに、調査対象学年の児童に対する授業の中で、児童の特性に応じた指導上の工夫を行いましたか。	95.4	88.8 (+6.6)	84.9 (+10.5)
学校支援地域本部などの学校支援ボランティアの仕組みにより、保護者や地域の人が学校における教育活動や様々な活動に参加してくれますか。	100	78.8 (+21.2)	82.7 (+17.3)

全国・県に比べて特に肯定的な回答が少なかった調査問題	本市	県	全国
調査対象学年の児童に対して、前年度に、学校図書館を活用した授業を計画的に行いましたか。	13.6	24.5 (-10.9)	47.0 (-33.4)
調査対象学年の児童に対して、前年度に、国語の授業において、コンピューター等の情報通信技術を活用した授業を行いましたか。	4.5	24.1 (-19.6)	34.1 (-29.6)
調査対象学年の児童に対して、前年度に、算数の授業において、コンピューター等の情報通信技術を活用した授業を行いましたか。	13.6	27.2 (-13.6)	40.8 (-27.2)
調査対象学年の児童に対して、前年度までに、将来就きたい仕事や夢について考えさせる指導をしましたか。	54.5	67.1 (-12.6)	72.0 (-17.5)

「教員の特別支援教育への理解」の肯定的な回答が95.4%であり、昨年度の結果(72.7%)から22.7%アップしている。特別支援教育への理解が進み、児童の特性に応じた指導上の工夫がなされていることが伺われる。特に、「一斉読書の時間の設定」「保護者等の学校行事への参加」は、全国・県よりも高いという結果が出ている。

一方、「学校図書館の活用」「情報通信技術の活用」「生き方教育、キャリア教育」については、各校で研修を深めていく必要がある。

イ 改善策

- (ア) 学校図書館を活用した授業を年間計画に組み込み、計画的に行う。
学校図書館を活用した授業の重要性を職員が共通理解し、年間計画に位置づけ、確実に実施していく。
- (イ) 情報通信技術を活用し、協働学習や課題発見、解決型の指導を行う。
情報担当や研修主任を中心に情報通信技術の活用研修を行う。また、どの職員でも情報機器を活用した授業ができるようにしていく必要がある。
- (ウ) 全教育活動を通して生き方教育・キャリア教育を進める。
授業や学校行事等のなかで生き方教育を積極的に取り入れる。キャリア教育推進に関して全職員が関心をもって学び、子どもたちが夢や希望をもって将来について考えることができる基盤づくりをする。

【中学校質問紙】

(1) 生徒質問紙

ア 成果と課題

(%)

全国・県に比べて特に肯定的な回答が多かった調査問題	本市	県	全国
今住んでいる地域の行事に参加していますか。	86.6	66.1 (+20.5)	43.5 (+43.1)
1, 2年生のときに受けた授業のはじめに、目標（めあて・ねらい）が示されていたと思いますか。	80.7	71.4 (+9.3)	71.5 (+9.2)
1, 2年生のときに受けた授業の最後に、学習内容を振り返る活動をよく行っていたと思いますか。	67.9	57.9 (+10.0)	53.3 (+14.6)
学校の授業時間以外に、普段（月～金曜日）、1日当たりどれくらいの時間、勉強をしますか。2時間以上している回答。（学習塾で勉強している時間や家庭教師に教わっている時間も含む）	78.1	73.6 (+4.5)	67.9 (+10.2)

全国・県に比べて特に肯定的な回答が少なかった調査問題	本市	県	全国
土曜日や日曜日など学校が休みの日に、1日当たりどれくらいの時間、勉強をしますか。（学習塾で勉強している時間や家庭教師に教わっている時間も含む）4時間以上と回答した割合	3.7	4.8 (-1.1)	5.2 (-1.5)

全国・県と比較して、1, 2年生の時に授業の最初に目標が示されていたと感じている生徒や、授業の最後に学習内容を振り返る活動をよく行っていたと感じている生徒が多い。また、平日に家庭での学習時間が2時間以上確保されている生徒が多い。これらのことから、学校での授業における学習で力を付けていること、また、家庭での学習時間が確保されており、家庭と学校での学習に対する望ましい取組が、本市の生徒の傾向として考えられる。また、地域の行事へ積極的に参加する生徒が多いことも特徴であり、地域全体で生徒を育てていこうとする高い地域性が考えられる。しかし、休みの日に4時間以上勉強する生徒の割合は全国・県と比較して低い。

また、平日に携帯電話やスマートフォンで通話やメール、インターネットを1日当たり30分以上する生徒の割合について、本市生徒は54.5%、県は59.3%、全国は60.7%であった。全国・県と比較すると本市の割合は少ないが、ここ数年で使用時間が大幅に増えてきているといえる。

イ クロス集計の結果

「朝食を毎日食べている。」「学校の規則を守っている。」「授業では、自分の考えを発表する機会が与えられていたと思う。」この3つの質問については、肯定的に回答した生徒と否定的に回答した生徒の平均正答率の差が、国語A・B、数学A・Bすべてにわたり20ポイント以上の差があった。また、「家で学校の宿題をしている」という質問に対しても、国語A・B、数学A・Bすべてにわたり15ポイント以上の差があった。これらから、本市では、規則正しい生活をし、授業において積極的に取り組んでいる生徒や家で宿題を確実にを行う習慣がついている生徒の平均正答率が高い傾向にあると考えられる。

ウ 改善策

(ア) 生徒指導や道徳教育の充実を図る。

本年度の調査でも、規範意識が高く、普段から規則正しい生活を心がけている生徒の平均正答率が高いことが分かった。毎日の生活のリズムを大切にし、心身共に健全な生活を送ることができる生徒の育成に更に努めていく必要がある。そのためには、学校における生徒指導体制をしっかりと確立するとともに、道徳教育をはじめとする心の教育に引き続き努力する必要がある。特に今回の調査では、地域行事へ積極的に参加する掛川市の生徒たちの姿が明らかになったが、郷土を愛する心の育成のために、積極的に「かけがわ道徳」を活用することが求められる。

(イ) 情報モラル教育の充実を図る。

ここ数年で、携帯電話やスマートフォンの所持率は大幅に上がってきている。情報通信機器への興味・関心が高くなること自体は問題ないが、その利用方法に問題があると考えられる。特に、長時間使用することに伴う学習時間の減少や、インターネットトラブルなど問題行動の増加など、情報モラルの欠如によると考えられる行動は、今後も増加すると考えられる。そこで、情報関連企業、警察、保護者、NPO法人等と連携して、情報モラル教育を積極的に行っていく必要がある。

(ウ) 授業の充実と家庭・地域との連携を強化する。

授業に積極的に取り組んでいる生徒や、家庭学習の習慣が定着している生徒の平均正答率が高いことが改めて分かった。今後、更に学力を確かなものにするためには、授業における生徒の意欲を高める努力が必要である。そのためには、現在進めている学びのユニバーサルデザインの考え方を各校が共通理解し、積極的な授業改善に努めていく必要がある。また、学園化構想により進められている幼小中合同の発達段階を考慮した研修、家庭・地域を巻き込んだ子育て、家庭学習の取組を更に強化する必要がある。

(2) 学校質問紙

ア 成果と課題

(%)

全国・県に比べて特に肯定的回答が多かった調査問題	本市	県	全国
調査対象学年の生徒に対して、前年度までに、資料を使って発表ができるよう指導しましたか。	88.9	58.2 (+30.7)	61.3 (+27.6)
調査対象学年の生徒に対して、前年度までに、地域の人材を外部講師として招聘した授業を行いましたか。	88.9	61.2 (+27.7)	58.5 (+30.4)
学校全体の言語活動の実施状況や課題について、全教職員の間で話し合ったり、検討したりしていますか。	100	79.5 (+20.5)	75.9 (+24.1)
調査対象学年の生徒に対して、前年度までに、家庭学習の課題の与え方について、校内の教職員で共通理解を図りましたか。(国語/数学共通)	100	88.2 (+11.8)	76.9 (+23.1)

全国・県に比べて特に肯定的な回答が少なかった調査問題	本市	県	全国
調査対象学年の生徒に対して、前年度までに、総合的な学習の時間において、課題の設定からまとめ・表現に至る探究の過程を意識した指導をしましたか。	55.5	80.6 (-25.1)	79.6 (-24.1)
調査対象学年の生徒に対して、前年度までに、コンピュータ等の情報通信技術を活用して、子供同士が教え合い学び合う学習(協働学習)や課題発見・解決型の学習指導を行いましたか。	22.2	50.6 (-28.4)	51.2 (-29.0)

イ 改善策

(7) 総合的な学習の時間における探求活動の充実

今回、全国・県と比較して総合的な学習の時間における課題の設定から、まとめ・表現に至る探究の過程を意識した指導について肯定的な回答が少ないという実態が明らかになった。今後、これらを充実させていくことは、各教科における学力の向上につながるものと考えられる。本市ではかけがわ型スキルとして6つの力を挙げているが、特に、「問題解決力」の育成における総合的な学習の時間の果たす役割は大きいと考えられる。

(4) ユニバーサルデザインを重視した研修体制の充実

本市は、情報通信技術を活用した教え合い学び合い学習や、課題発見・解決型の学習指導が全国・県と比較して低いことが明らかとなった。本市が目指している「学びのユニバーサルデザイン」を重視した授業を実現するためには、ICTを積極的に授業に取り入れることが必要であると考えられる。また、各校における授業研究や研修体制について、「かけがわ学力向上ものがたり」を基に、より共通した視点から理解を深めていく必要がある。

(5) 職員の共通認識を更に深める

生徒の学力を向上させるためには、研修や授業における職員の共通した意識や取組が欠かせないことは、今回の学校質問紙からも理解できる。この高い意識を維持することは、最低限必要である。

5 学びの環境改善のための提言

分析結果ならびに、静岡県教育委員会からの通知「静岡県の子どもの学力向上のための提言」に基づき、以下の4点を提言する。

- (1) 今求められている「学力」について全教職員が共通認識をもつ。
全国学力・学習状況調査の問題にふれたり、学習指導要領を読み返すなどして、今求められている学力がどのようなものかを、全職員が共通認識を持つことが必要である。
- (2) 確かな学力を身につけるための授業改善を強力に推し進める。
 - 単元あるいは1時間の授業の中で「つけたい力」を明確にする。
 - 単元を通して、「基礎的な知識・技能を確実に習得させること」「習得した知識・技能を活用させること」の授業をバランスよく取り入れる。
 - 自分の考えを既習事項や図・表・グラフ・式等を使って相手に伝えたり、資料から読みとった事柄を根拠にして説明したりする活動を取り入れる。
 - 授業のねらいを達成させるために、ICTを効果的に活用する。
 - 実生活と関連づけた内容や発展的な内容、補充的な内容を計画的かつ積極的に取り入れる。
 - 長文や資料を用いて、把握した内容を要約して書いたり、わかりやすく相手に伝えたりする活動を通して、「読み取る力」をつける。
 - 教員自らが問題（テスト）を作成するなどして、毎時間あるいは定期的に学習内容の定着度の見取りを行う。
- (3) 生徒指導や学級経営、道徳の授業の充実を図る。
 - よりよい人間関係を基盤とした学級づくりや達成感・自己有用感を味わうことができる学級づくりを心がける。
 - 自尊感情や規範意識を高めたり、自立心を育み積極的に学習に取り組む子どもを育てたりすることをめざし、「かけがわ道徳」を核とした道徳教育の充実に努める。
- (4) 子どもが家庭学習に主体的に取り組んだり、子どもの学びを支えたりする学習環境を整える。
 - 「教科の力を伸ばす家庭学習」の研究を進める。
 - 学校支援ボランティア（地域住民・大学生・高校生等）を中心に、学校の補充学習を支援する体制をつくる。
 - 家庭での規則正しい生活習慣や学習に集中できる家庭環境を大切にするように、学園単位で各家庭に働きかけをする。

上記提言を、学力向上対策の基盤として、「夢に向かって、自ら考え自ら判断し、心豊かにたくましく生きる子どもの育成」に向けて、市内31校が一丸となって取り組むことを期待する。

6 これまでの掛川市の調査結果について

(1) 平成19年度から平成21年度までの結果

ア 小学校【市平均正答率と全国・県との比較】

	国語A	国語B	算数A	算数B
平成19年度	◎	◎	◎	△
平成20年度	△	◎	△	◎
平成21年度	◎	△	◎	○

◎:全国及び県以上

○:全国又は県以上

△:全国及び県未満

- ・学習指導要領の3領域1事項「話すこと・聞くこと」「書くこと」「読むこと」「言語事項」別に、3年間の平均正答率を県及び国と比較すると、「書くこと」が一番優れている。(国語A)
- ・年度によって課題となる領域は異なり、平成20年度は「言語事項」(国語A)、平成21年度は「読むこと」(国語B)に関する力が不足している。
- ・「図形」では、図形の定義や性質を理解して答える問題の正答率が全国・県と比べておおむね高く、図形についての知識を活用する力に優れている。(算数A / 算数B)
- ・グラフを読み取る問題の正答率が低く、グラフを見て必要な情報を取り出す力が不足している。(算数B)

イ 中学校【市平均正答率と全国・県との比較】

	国語A	国語B	数学A	数学B
平成19年度	○	◎	◎	◎
平成20年度	◎	◎	◎	◎
平成21年度	○	○	○	◎

◎:全国及び県以上

○:全国又は県以上

△:全国及び県未満

- ・学習指導要領「書くこと」の領域に関する問題の平均正答率が高く、必要な情報を集め、目的に合わせ工夫して文章を書く力がついている。(国語A / 国語B)
- ・3年間共通の課題は見あたらないが、特に平成21年度は「言語事項」の理解が不足している。(国語A)
- ・図形に関する問題の平均正答率が高く、図形の性質を良く理解している。(数学A / 数学B)
- ・3年間共通の課題は見あたらないが、特に平成21年度は「数と式」の領域の、比の意味、正と負の数についての理解が不足している。(数学A)

※平成22年度は、抽出調査のため市町の集計結果公表なし。

※平成23年度は、東日本大震災のため調査中止。

(2) 平成24年度の結果

教科に関する調査では、全国・県と比較して、小学校は平均正答率の低いものが多く、中学校は、全てが高い傾向となった。

小学校においては、全ての教科において、全国よりも平均正答率が低かった。特に理科(知)は、3%以上低かった。しかし、県と比較した場合、

国語A Bはともに1%程度低かったが、算数A B及び理科(知)(活)は、1%程度高かった。

一方、中学校では、全ての教科において、全国・県よりも平均正答率が高かった。特に、全国との比較においては、国語A以外の全てにおいて、4~5%程度高かった。また、県との比較においても、全ての教科で高く、特に国語B・理科(知)については、3%程度高かった。

【市平均正答率と全国・県との比較】

【小学校】	県	全国	【中学校】	県	全国
国語A	△	△	国語A	○	○
国語B	△	△	国語B	◎	◎
算数A	○	△	数学A	○	◎
算数B	○	△	数学B	○	◎
理科(知)	○	▲	理科(知)	◎	◎
理科(活)	○	△	理科(活)	○	◎

※3%差を基準：3≧◎、3>○>0、0>△>-3、-3≧▲

(3) 平成25年度の結果

教科に関する調査では、全国・県と比べて、小学校は平均正答率の低いものが多く、中学校では、全てが高い傾向となった。

小学校においては、全ての教科において、全国よりも平均正答率が低かった。特に、国語Aは、3%以上低かった。県と比較した場合は、国語B、算数Bが県よりも低かったが、その差は1%未満となっている。

一方、中学校では、全ての教科において、全国・県よりも平均正答率が高かった。特に、全国との比較においては、数学Bが3%以上高かった。また、県との比較においても、全ての教科で高かった。

【市平均正答率と全国・県との比較】

【小学校】	県	全国	【中学校】	県	全国
国語A	○	▲	国語A	○	○
国語B	△	△	国語B	○	○
算数A	○	△	数学A	○	○
算数B	△	△	数学B	○	◎

※3%差を基準：◎≧3、3>○>0、0>△>-3、-3≧▲

(4) 平成26年度の結果（あわせて3頁を参照）

教科に関する調査において、各教科の平均正答率は、小学校、中学校ともに全ての教科で、全国・県よりも高い結果となった。

【市平均正答率と全国・県との比較】

【小学校】	県	全国	【中学校】	県	全国
国語A	○	○	国語A	○	○
国語B	○	◎	国語B	◎	◎
算数A	○	○	数学A	◎	◎
算数B	○	○	数学B	◎	◎

※3%差を基準：◎≧3、3>○>0、0>△>-3、-3≧▲

7 おわりに

掛川市教育振興基本計画（後期）「人づくり構想かけがわ」では、「確かな学力の向上を目指す学校」を、学校教育の大きな柱の一番目に位置づけている。基礎・基本を確実に身に付け、学ぶ意欲や思考力・判断力・表現力など子どもたちの「生きる力」を育む魅力ある授業を目指すために、様々な施策・事業が展開されている。

掛川市教育委員会は、平成26年3月、21世紀を生き抜くために、子どもたちが身に付けるべき主なスキルを「かけがわ型スキル」と定めて、授業改善の指針となる「かけがわ学力向上ものがたり」を策定した。各学校においては、児童生徒の学習実態に基づいた学校独自の特色ある「我が校のものがたり」を作成し、授業改善に向けた積極的な取組が進められている。今後は、本報告内容と自校の分析を「我が校のものがたり」に反映させ、さらに効果的な実践を積み重ねていくことを強く望む。

関係機関においては、更に掛川市の教育を充実させるために、今回の全国学力・学習状況調査結果の分析から見えてきた成果や課題等をもとに、教育設備、教材備品の充実、各種支援員の配置等、物的・人的な支援を含めた計画的かつ効果的な施策を打ち出すことを期待する。

本分析委員会では、平成26年10月、「かけがわ学力向上ものがたり」家庭教育支援資料として作成したリーフレット「家庭のものがたりの手引き」を公表した。各家庭においては、中学校区学園化構想で推進している子育て事業や「かけがわお茶の間宣言」の実践などとともに、ぜひとも御活用いただきたい。

8 平成26年度 掛川市全国学力・学習状況調査分析委員会

委員長	安松 敏	第一小学校長
副委員長	白井 久雄	大淵小学校教頭（小学校部長、質問紙）
副委員長	板倉 康弘	栄川中学校教頭（中学校部長、質問紙）
委員	鈴木まり子	中央小学校教諭（国語）
	高村 知史	西山口小学校教諭（国語）
	板倉 亨	原谷小学校教諭（算数）
	萩田 歩	和田岡小学校教諭（算数）
	古屋 映里	東山口小学校教諭（質問紙）
	落合 訓子	北中学校教諭（国語）
	由井原千春	西中学校教諭（国語）
	伊藤 良典	原野谷中学校教諭（数学）
	池田 直茂	城東中学校教諭（数学）
	安野 裕介	東中学校教諭（質問紙）
事務局	佐藤 嘉晃	学校教育課長
	柴田 勝明	学校教育課指導主事

分析委員会協議内容（於：掛川市教育センター、13:30～16:30）

第1回 9/16(火)	・委員会の目的、分析方法について共通理解 ・傾向と課題の把握（部会で分析）
第2回 9/25(木)	・傾向と課題のまとめ（部会で分析） ・家庭向けリーフレットの検討（全体で協議）
第3回 10/3(金)	・各部会からの報告・協議（全体で協議） ・分析の見直しと成果・課題のまとめ（部会で協議）
第4回 10/21(火)	・改善プランの検討（部会で協議）
第5回 11/4(火)	・改善プランの検討及び策定（全体及び部会で協議）